

<試験研究情報>

本年発生した病害虫の特徴 病害虫部…………… 2

<農業改良課情報>

農作物病害虫・雑草防除指導指針を活用ください!……………6

<県植防情報>

新農薬等展示ほ調査成績中間検討会……………8

農薬の登録状況……………9

<連載>

「植物防疫基礎講座」 — 野菜のふしぎ — (第19話 シュンギクの不思議) ……11
永井 耕介

— 田畑の草くさ —

洋種山牛蒡 (ヨウシュヤマゴボウ)

ヤマゴボウ科ヤマゴボウ属の多年草。北アメリカ原産で明治の初めに渡来したとされ、空き地や道端などにごく普通。茎は太く赤みを帯び、背丈は2mにもなる。花序は垂れ下がり、花はやや赤みを帯びた白色であるが熟すと黒紫色になる。この果実をつぶすと赤紫色の果汁が出るが、これが衣類や皮膚に着くとなかなか落ちない。全体にアルカロイドなどの有毒成分が含まれる。

子どものころ、大阪のS市に住んでいた。小学校の4、5年生の頃だっただろうか算盤塾へ通っていた。特に算盤の上達を望んでいたわけでもなく、少し離れたところの子ども達も集まってくるのが楽しかった。その塾の道向こうに少し大きな空き地があった。塾に通う子どもらは、早めに集まって空き地で遊ぶのが楽しみであった。

夏休みに入ると、集まる時間も早くなってくる。その空き地にも鬱蒼と草が繁り、その草をかき分けての秘密の基地づくりが始まるのである。周りには子どもの背丈以上の草が繁っていた。通路になるところを足で踏み固めながら、その奥を少し広げて草を座布団のように敷き、何するわけでもなく家から持ってきたお菓子を食べていた。

ところがある日を境に基地づくりが終わった。仲間の誰かが服を紫色に染めて帰ったところ家の人に見とがめられ、お兄さんかお姉さんか、誰か植物に詳しい人に教えられた。その草は「ヨウシュヤマゴボウ」と言って毒なんだよ、と。

以来、未だに、ヨウシュヤマゴボウを見ると触らずに避けて通り過ぎている。

(健)

本年発生した病害虫の特徴

～病害編～

病害担当

イネ

葉いもち

7月下旬の現地調査での発生圃場率は、早期水稲 11.3% (平年値 17.4%)、普通期水稲 23.9% (同 19.3%) と平年並～やや多い発生が確認された。8月中旬の普通期水稲対象の緊急巡回調査では、発生圃場率は 64.6% と増加した。全体的には、早期水稲ではやや多い発生、普通期水稲では多い発生となった。なお、6月下旬から7月上旬にかけての天候不順により、いもち病発生時期予測システム (BASTAM) の葉いもち感染好適条件が多数回出現したため、病害虫発生予察防除情報第3号(令和3年7月9日付)を発表し、防除指導を行った。

穂いもち

早期水稲において、9月上旬の現地調査で、発生圃場率 16.7% (平年値 6.6%) とやや多い発生となった。普通期水稲においても9月下旬の調査では発生圃場率 22.7% (平年値 12.5%) とやや多くなり、全体的にやや多い発生となった。

本年の梅雨明け後の気象は、8月中旬以降、停滞前線の影響により低温・多雨傾向であった。そのため、本田防除ができなかった圃場を中心に、穂いもちの発生が助長され、やや多い発生となったと考えられ、病害虫発生予察防除情報第4号(令和3年8月17日付)および病害虫発生予察注意報第3号(令和3年8月20日付)を発表して、防除指導を行った。

紋枯病

7月下旬の現地調査では、早期水稲の発生圃場率 6.5% (同 8.0%) とやや少ない発生であった。その後8月6半旬の高温により平年並の発生となり、9月下旬の現地調査においては、発生圃場率 33.4% と増加した。

縞葉枯病

9月下旬の現地調査では発生圃場率は 8.2% (平年値 9.4%) と平年並の発生であった。西播磨を中心とするヒメトビウンカと同ウイルス保毒虫率の高い地域では一部でやや多発したが、全体的に平年並の発生であった。

稲こうじ病

9月下旬の現地調査では発生圃場率 5.7% (平年値 1.3%) であった。発生は一部地域に限られたものの、全体的にはやや多い発生であった。

ムギ

赤かび病

5月下旬の調査では発病穂率 3.3% (平年値 0.7%)、6月上旬の現地調査では発生圃場率 64.7%、発病穂率 13.6% とやや多い発生となった。発生が増加した要因としては4月6半旬に平年を上回る量の降水があり、適期防除が実施できなかったことが考えられ、

病虫害発生予察防除情報第1号(令和3年4月14日付)を発表し、防除指導を行った。

うどんこ病

4月下旬の場内調査では発病茎率94.0%であった。同時期の現地調査では発生圃場率40%、発病茎率16.3%と、例年発生が見られない本県で特異的かつ多い発生であった。そのため、病虫害発生予察注意報第1号(令和3年4月28日付)を発表し、防除指導を行った。

ダイズ

立枯性病害

9月下旬の調査では発生圃場率は35.0%(平年値27.4%)で平均発病株率は1.3%(同0.8%)とやや多い発生であった。多発要因は、8月中旬以降の低温・多雨により、圃場の土壌水分が高い状態が長期間持続したことが影響したものと考えられる。

タマネギ

べと病

5月中旬の現地調査では発生圃場率50.0%(前年値12.5%)、発病株率2.6%(前年値0.6%)であった。また、周辺圃場では発生圃場率27.3%(平年値24.3%)、発病株率3.4%(平年値5.6%)となり、全体的に平年並の発生となった。

白色疫病

冬期間は暖冬傾向で定期的な降雨があったが、栽培期間を通じて効果的な防除を実施したことから、発生が抑制され5月下旬の調査では認められなかった。

細菌性病害

5月中旬の現地調査では発生圃場率53.6%(前年値71.9%)、発病株率1.4%(前年値3.4%)であった。また、周辺圃場では発生圃場率30.8%(平年値39.0%)、発病株率0.2%(平年値0.6%)となり、全体的に平年並の発生となった。

春キャベツ

菌核病

5月下旬の現地調査では、概ね、平年並の発生であった。本病は春期の降雨が発生を助長する。本年4月は少雨傾向であったが、4月6半旬、5月3半旬の平年を上回る降雨により、平年並の発生になったと考えられる。

春レタス

灰色かび病

4月上旬の現地調査では、発生圃場率16.7%(前年値7.1%)、発病株率0.5%(前年値0.1%)であった。

菌核病

4月上旬の現地調査では、発生圃場率25.0%(前年値10.7%)、発病株率0.8%(前年値0.6%)と平年並の発病が認められた。

(兵庫県立農林水産技術総合センター農業技術センター 病虫害部病害担当)

本年の病害虫発生の特徴

～虫 害 編～

虫 害 担 当

イネ

ヒメトビウンカ

小麦における第1世代虫の発生量は平年並であった。水稲本田では広い地域で発生が確認され、9月上旬の払い落とし調査では、成・幼虫12頭/10株（平年値27.9頭）とやや少なかったが、栽培期間を通じての発生量は平年並であった。第1世代虫のイネ縮葉枯ウイルス保毒虫率は、2.1%と昨年度(1.8%)に比べてほぼ同等であった。

セジロウンカ

予察灯への初飛来は7月4、6日（加西市及び朝来市）であり、飛来時期として平年並であった。8月下旬の調査では発生圃場率56.4%（平年値60.8%）、払い落とし調査では成・幼虫40頭/10株（平年値21.7頭）であり、県全体ではやや多い発生となった。

トビイロウンカ

予察灯へ初飛来は8月26日であった。8月下旬の調査ではごく一部の地域で発生が認められた程度で、県全体としては少ない発生で推移した。今年度は、飛来が遅かったことから、秋季の発生も少なく、“坪枯れ”の発生はほとんどみられなかった。

コブノメイガ

予察灯、フェロモントラップとも捕獲は見られず、場内圃場での発生は認められなかった。現地圃場ではわずかに発生が認められ、県全体では少ない発生となった。

斑点米カメムシ類

予察灯では主にカスミカメムシ類の誘殺が6月以降続き、7月の合計誘殺数は加西市で88.0頭（平年値589.6頭）、南あわじ市で261.0頭（同568.0頭）、朝来市で11.0頭（同139.4頭）であった。7月下旬の調査では、出穂の有無にかかわらず本田で発生が確認され、以降はやや多い発生で推移した。

今季はイネカメムシとミナミアオカメムシの発生が目立った。一部の圃場では籾の不稔による直立穂が多く見られた。イネカメムシについての病害虫発生予察技術情報第1号を11月30日に発表した。

スクミリンゴガイ

今年の1、2月が暖冬であったため、県北を除く地域で昨年並～やや多い発生となった（農業改良普及センター調べ）。移植前後の防除対策を促すため、病害虫発生予察防除情報第2号（令和3年4月30日付）を発表した。

ダイズ

ハスモンヨトウ

9月の調査では、白変葉が1.1カ所/a（平年値0.7カ所）、発生圃場率40.0%（同31.7%）とほぼ平年並みの発生であったが、その後は定期的な降雨により、平年よりやや少ない発生となった。

野菜共通

ハスモンヨトウ

フェロモントラップでは6月～7月にかけて誘殺数が増加し、一時的に平年より多い時期があったが、その後、7月1半旬～8月2半旬までのフェロモントラップの合計誘殺数は575.2頭（平年値507.7頭）とほぼ平年並みの状態であった。9月以降は、地域によっては誘殺数が平年よりやや多い状態で推移し、11月以降も幼虫の発生がみられた。

シロイチモジヨトウ

フェロモントラップでは6月～7月にかけて誘殺数が増加し、一時的に平年より多い時期があった。7月1半旬～8月2半旬の合計誘殺数は98.9頭（平年値74.8頭）と平年よりやや多かったが、8月1カ月間の合計誘殺数としては64.1頭（平年値96.5頭）とほぼ平年並であった。

ハイマダラノメイガ

誘致植物(クレオメ)では、6月上旬から幼虫の発生が確認され、7月の寄生花枝率が47.0%と、平年(14.0%)を大きく上回り、令和3年度病害虫発生予察注意報第2号(令和3年8月12日付)を発表した。その後降雨が続いた影響で増殖が抑えられたと考えられ、秋季には平年並の発生となった。

ネギアザミウマ

3月から発生が認められており、令和2年度病害虫発生予察防除情報第6号(令和3年3月17日付)を発表して、対策への注意喚起をはかった。5月中旬の調査では、発生圃場率64.3%(前年値84.4%)、被害株率27.4%(前年値34.1%)であり、前年と比較すると発生はやや少なかった。

果樹共通

果樹カメムシ類

チャバネアオカメムシのフェロモントラップでは、4月～5月の誘殺数合計が59頭であり、多発した2019年を除く過去5年平均(42頭)とほぼ同程度であった。8月の予察灯におけるチャバネアオカメムシの合計誘殺数は20.8頭と多発はみられず、全体的に平年並みの発生で推移した。

ヨコバイ科の一種 *Singapora shinshana* (和名未定)

淡路、神戸、東播磨、北播磨、西播磨、丹波地域においてヨコバイ類の多発とそれに伴うウメ、モモの葉の白化症状がみられ、ヨコバイ類は本県で未確認のヨコバイ科の一種 *Singapora shinshana* であることが確認された。病害虫発生予察特殊報第1号(令和3年10月29日付)を発表した。

(兵庫県立農林水産技術総合センター農業技術センター 病害虫部虫害担当)

- (3) 「病虫害雑草名」を検索、
一覧表から検索する病虫害・雑草名にチェックを入れ、「表示」をクリックします。



- (4) 登録のある農薬の一覧が表示されます。「◎」の表示がある農薬が県の推奨農薬です。

たまねぎ-ネギアザミウマ

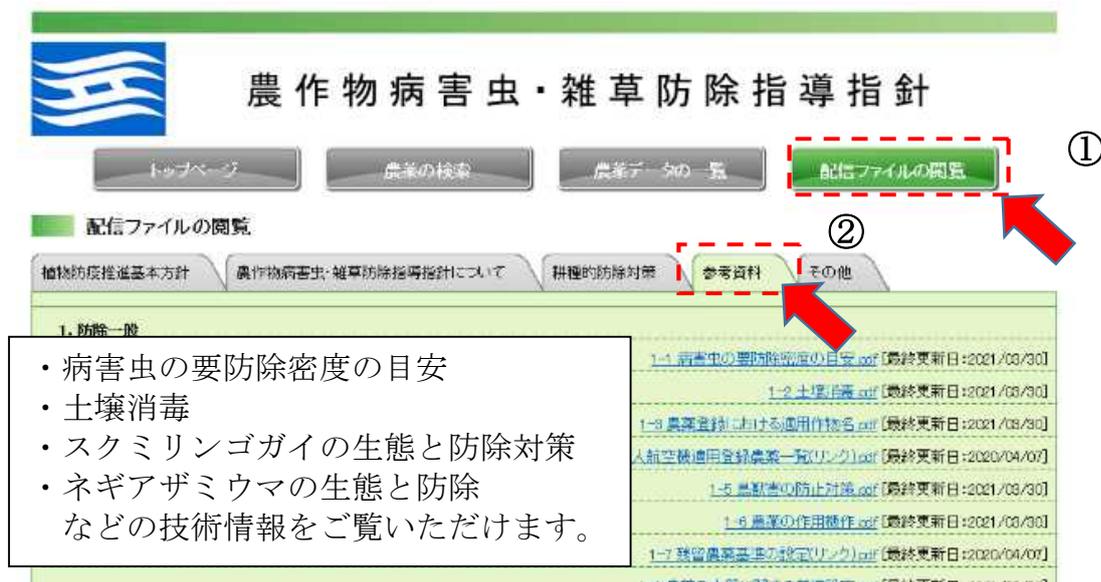
※農薬の取用にあたっては、必ず農薬のラベルに記載されている登録内容を確認ください。

更新年日:2020/11/16

農薬の名称	推奨	有効成分の名称	適用作物名	使用方法	病虫害雑草名	希釈倍数使用量	使用時期	本剤使用回数	有効成分の総使用回数	適用場所
1 「興農」ジェネレート水溶液【指針採用】		アセフェート	たまねぎ	散布	ネギアザミウマ	1000~1500倍	収穫21日前まで	5回以内	5回以内	
2 ウララDF【指針採用】		フロロピコキシメト	たまねぎ	散布	ネギアザミウマ	2000倍	収穫7日前まで	2回以内	2回以内	
3 オルトラン水和剤【指針採用】	◎	アセフェート	たまねぎ	散布	ネギアザミウマ	1000~1500倍	収穫21日前まで	5回以内	5回以内	
4 オルトラン水和剤【指針採用】	◎	アセフェート	たまねぎ	散布	ネギアザミウマ	300倍	収穫21日前まで	5回以内	5回以内	
5 オルトラン水和剤【指針採用】	◎	アセフェート	たまねぎ	無人航空機による散布	ネギアザミウマ	16倍	収穫21日前まで	5回以内	5回以内	
6 クミアイコルト顆粒水和剤【指針採用】		ピリフルキナゾン	たまねぎ	散布	ネギアザミウマ	2000倍	収穫前日まで	3回以内	3回以内	
7 クミアイダーズバン乳剤(40)		クロルピリホス	たまねぎ	散布	ネギアザミウマ	1000~1500倍	収穫21日前まで	2回以内	2回以内	

【ワンポイント】

病虫害防除に関する技術情報をみたい場合、①「配信ファイル」をクリック、②「参考資料」のタブをクリック



新農薬展示ほ調査成績中間検討会を開催

令和3年11月12日（金）、神戸市の農業共済会館において県農業改良課、県立農林水産技術総合センター、農業改良普及センター及び賛助会員等に出席いただき「令和3年度新農薬等展示ほ調査成績中間検討会」を開催いたしました。

当日は、県下の農業改良普及センターで実施された除草剤、殺菌・殺虫剤の効果試験の結果について、各専門技術員の進行により検討が行われました。対象となった薬剤は41剤53試験で、防除効果、葉害、普及性や農家の意見、問題点など活発な議論が交わされました。

除草剤

水稲・畑作除草剤17剤22試験の成績を検討しました。成績検討の結果は、普及上問題のない総合判定「A」が16剤、1剤は「B」判定となりました。

また、除草剤1剤は次回の以降の検討と判定になります。

殺菌・殺虫剤

殺虫剤13剤16試験、殺菌剤1剤1試験、殺菌殺虫剤9剤13試験、過年度未了剤（殺虫剤）1剤1試験の成績を検討しました。殺虫剤は、総合判定「A」が12剤（含過年度分1剤）でした。2剤は次回に検討される試験が含まれているので、総合的な判定は次回に持ち越されました。殺菌剤は、総合判定「A」が1剤で、殺菌・殺虫混合剤は、総合判定「A」が9剤でした。

その結果、殺虫剤11剤（再試験1剤含む）、殺菌剤3剤、その他1剤の15剤は次回以降の検討と判定になります。

展示ほについてのご連絡

令和4年度新農薬等展示ほ設置申込みの受付を開始しました。賛助会員（農薬メーカー等）は設置を希望する薬剤の設置申込書を令和4年2月1日（火）までに兵庫県植物防疫協会へ提出してください。

本年度の最後の成績検討会は令和4年3月11日（金）に兵庫県農業共済会館で開催しますのでご了解願います。

農薬の登録状況（令和3年9月30日現在） ※表中の数値は全て農薬年度末日現在

新規化合物の開発に伴う農薬登録や登録適用拡大等の申請は毎日のように行われ、独立行政法人農林水産消費安全技術センター農薬検査部等において審査され農薬登録されます。このような中で、農薬の登録状況をリアルタイムで正確に把握することは非常に困難ですが、農薬検査部が毎年取りまとめて発表します「植物防疫地区協議会資料」を引用して、各農薬年度末（各年9月30日）の農薬登録状況を編集しました。

1 登録有効成分数

新規に登録されたもの、失効したものを加減し、登録有効成分数を集計しました。

令和3農薬年度中に5化合物の有効成分が農薬として新規に登録され、2化合物が失効しています。その結果、令和3年9月30日現在、599化合物が農薬の有効成分として登録されています。

	H25	H29	H30	R1	R2	R3
新規登録成分	種類 16	種類 10	種類 10	種類 10	種類 8	種類 5
新規失効成分	4	6	3	4	8	2
登録有効成分	555	583	590	596	596	599

2 農薬有効登録件数

令和3農薬年度中（令和2年10月1日～令和3年9月30日）に110件が新規に登録されました。失効したものを除くと、令和3年9月30日現在4,307件が農薬として登録されています。この件数は農薬の商品ごとに集計したもので、同じ種類名であっても、商品名が異なれば1件としてカウントされています。

	H25	H29	H30	R1	R2	R3
新規登録件数	種類 230	種類 151	種類 160	種類 138	種類 155	種類 110
有効登録件数	4,342	4,317	4,282	4,290	4,275	4,307

3 使用目的別有効登録件数の推移

使用目的別品目	H1	H20	H25	H29	H30	R1	R2	R3
殺虫剤	件 2,709	件 1,219	件 1,097	件 1,066	件 1,073	件 1,064	件 1,050	件 1,051
殺菌剤	1,236	965	912	898	890	890	888	894
殺虫殺菌剤	1,099	510	507	475	469	451	406	401
除草剤	795	1,344	1,487	1,547	1,522	1,554	1,602	1,629
殺そ剤	85	33	29	23	23	23	21	22
植物成長調整剤	102	83	91	95	93	95	98	101
その他	248	187	219	213	212	213	210	209
合計	6,274	4,341	4,342	4,317	4,282	4,290	4,275	4,307

農薬登録数の推移を使用目的別に集計しました。合計では平成元年農薬年度に最多となり、その後は減少しましたが、平成30年度以降はほぼ一定で推移しています。ただし、除草剤は増加傾向で推移しています。

4 農薬の毒性別登録件数の比率

登録されている農薬を殺虫剤、殺菌剤、除草剤、その他に分類し、それぞれの中で特定毒物、毒物、劇物、普通物別に登録件数の比率の推移を示しました。昭和30年代には全農薬の半分以上が殺虫剤でありましたが、昭和40年代に殺虫剤の登録件数は40%台に減少しました。その後も暫時減少し、平成15農薬年度では31.3%でしたが、平成25農薬年度からは20%中半で推移しています。殺菌剤は平成25年頃からほぼ横這いで推移しています。

除草剤は平成25農薬年度からはほぼ35%の微増傾向で推移しています。

品目	毒性区分	S45	H15	H25	H30	R1	R2	R3
		%	%	%	%	%	%	%
殺虫剤	特定毒物	0.2	0.2	0.2	0.3	0.3	0.3	0.3
	毒物	3.3	0.4	0.2	0.1	0.1	0.0	0.0
	劇物	24.6	12.4	7.3	6.2	6.0	5.8	5.6
	普通物	16.9	18.3	17.6	18.5	18.4	18.5	18.5
	小計	45.0	31.3	25.3	25.1	24.8	24.6	24.4
殺菌剤	特定毒物	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	毒物	3.4	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	劇物	3.7	1.5	1.2	1.2	1.2	1.3	1.3
	普通物	18.9	21.3	19.8	19.6	19.5	19.5	19.5
	小計	26.0	22.8	21.0	20.8	20.7	20.8	20.8
除草剤	特定毒物	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	毒物	0.1	0.1	0.1	0.1	0.0	0.0	0.0
	劇物	10.4	0.3	0.3	0.2	0.2	0.2	0.2
	普通物	15.1	26.9	33.9	35.3	36.0	37.2	37.6
	小計	25.6	27.3	34.2	35.5	35.2	37.5	37.8
その他	特定毒物	0.2	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	毒物	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0
	劇物	0.3	2.8	0.8	0.8	0.7	0.7	0.6
	普通物	2.9	15.8	18.7	17.8	17.5	16.5	16.4
	小計	3.4	18.6	19.5	18.6	18.2	17.2	17.0
全体	特定毒物	0.4	0.2	0.2	0.3	0.3	0.3	0.3
	毒物	6.8	0.5	0.2	0.2	0.1	0.1	0.1
	劇物	39.0	17.1	9.8	8.4	8.2	7.9	7.7
	普通物	53.8	82.2	89.8	91.2	91.4	91.7	91.9
	合計	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

毒性別の推移でみると、昭和35農薬年度には特定毒物と毒物で49.5%とほぼ半数を占めていましたが、昭和46年1月の農薬取締法の改正による農薬の安全確保の強化に伴い著しく減少し、昭和45農薬年度には両者合わせて7.2%に減少しています。その後も減少し、最近では0.5%以下で推移しています。また平成15農薬年度以降は普通物が僅かながら増加の傾向にあり、その分劇物が減少しており、急性毒性の面からはさらに安全性が確保できていると言えるでしょう。

野菜のふしぎ



— 第19話 シュンギクの不思議 —

農学博士 永井耕介

「春菊（シュンギク）」は関西では「菊菜（キクナ）」とも呼ばれています。11月～3月が旬で、すき焼き、水炊きなどの「鍋料理の具材」には欠かせないものです。シュンギクは一般に「食用」に使われていると思われていますが、実際に食用に使われているのは「日本」を含む東南アジアの一部の国で、ヨーロッパなど多くの国々ではもっぱら「観賞用」の「花」として用いられているのです。

栄養面では、シュンギクは「ホウレンソウ」と同様に、βカロチン、ビタミンC等のビタミン類やカルシウムなどのミネラル類を豊富に含んでいます。特にカルシウムは「ホウレンソウ」の2倍以上も含んでいるのです。

どのようなシュンギクが「消費者」から求められているのでしょうか。もちろん、「新鮮」で「緑色が濃い」ものです。しかしながら、シュンギク自体の養分バランスによっては葉色が薄くなったり、黄化する場合があります。例えば葉の周縁が黄化する症状がみられることがあります。この症状は一般に「額縁症状」と呼ばれています。額縁症状は微量元素（微量に含まれるミネラル）の「マンガン」の不足が原因であることが最近明らかになりました。さらに、土壌の中に「十分」にマンガンが存在している場合でも、マンガン欠乏症が発生する場合があることも解ってきました。

では何故、土の中に十分にマンガンが存在しているのに、シュンギクがそれを利用できないのでしょうか。大きく分けて2つ考えられます。その1つは土壌の中にマンガン以外のカルシウムやマグネシウムなどのミネラル類が多量に含まれている場合です。根への吸収をじゃまする他のミネラルが多いとマンガンが吸収される「機会（チャンス）」が相対的に少なくなるのです。もう1つは土づくりのために施された有機物を分解するのに多量のマンガンが使われるからです。このことも最近明らかになってきたことです。このよう

な理由で、土壌にマンガンが存在していてもシュンギクが吸収できないのです。

では、一度「額縁症状」が発生してしまえば治せないのでしょうか。いいえ、たとえ額縁症状になったシュンギクでも微量元素の「マンガン」を葉面に散布すれば、**数日で治るか、症状の大幅な軽減**ができます。植物は微量元素の1つでも不足や過剰になると直ぐに「葉」に「シグナル」がでるように「DNA（遺伝子）」に設計されているのです。

緑色の濃いシュンギクは農家の日頃の土作りとシュンギクへの思いの賜物です。県内各地で美味しいシュンギクが栽培されています。是非ご賞味ください。



兵庫県では淡路から但馬まで多様な気候風土の中、「シュンギク」や「エンドウ」など地域特産農産物が作られています。それらは色、形も多様で食べる人の目を楽しませてくれます。また、緑（葉緑素）、橙（βカロチン）、赤（リコピン）、紫（アントシアニン）などそれぞれの色素が目を楽しませるだけでなく、身体の健康を維持する種々の機能成分であることも明らかになってきました。

私は北部農業技術センターで長年、野菜や果物の味や栄養価さらには鮮度保持の技術を研究してきた「トマト博士」です。これから紹介する県内の特産農産物のすばらしさを感じていただければ、また、1つでも「ヘー」と思われることがあればうれしいです。

（兵庫県植物防疫協会 技術顧問）

【編集後記】

令和3年度No.3をお届けします。

2021年は皆さまにとってどのような年だったでしょうか。今年も新型コロナウイルスで開け、1年を通して最大の関心事ではなかったでしょうか。

そのような中でも、東京オリンピック・パラリンピックは多くの感動と勇気を与えてくれたと思います。中でもソフトボールと野球の熱戦は私も手に汗してテレビにかじりつきました。

惜しくもメダルに届かなかった選手の活躍にも感動しました。例えば、男子ゴルフの松山英樹選手。最終日、最終組で回り、一時首位に立ちながらも2mぐらいのパットが惜しくもはずれ、最後は3位対で上がりました。その後のプレーオフでも敗れ、4位対。日本全体の期待を背負った緊張感漂う素晴らしい戦いぶりでした。メダルには届かなかったものの、足腰が弱りゴルフに行けなくなった私にゴルフのすばらしさやむずかしさを改めて味あわせてくれた大会でした。

本年も残り僅かとなりました。この1年間も兵庫県植物防疫協会の事業運営にご高配いただきましたことに厚くお礼申し上げます。来たる2022年が皆さま方並びにご家族にとってより良い年となりますようにお祈りいたします。(N)

兵庫県植物防疫協会 今後の予定

令和4年

- 1月27日 令和3年度農薬安全使用技術講習会（神戸市）
- 2月1日 令和4年度新農薬展示ほ設置申込書提出締切り
- 2月3日 令和3年度農薬安全使用技術講習会（三木市）
- 2月8日 令和3年度農薬安全使用技術講習会（姫路市）
- 3月11日 新農薬等展示ほ成績検討会

発行元

兵庫県植物防疫協会

神戸市中央区下山手通4-15-3

TEL:078-332-7144、FAX:078-332-7152

Mail:hyogo-syokubo@mountain.ocn.ne.jp



新農薬展示ほ調査成績中間検討会